



立教大学

社会福祉ニュース

第19号 1998年3月31日発行 編集発行人 佐藤悦子 東京都豊島区西池袋3 立教大学社会福祉研究所

「引き続き発信します」

所長 佐藤悦子

1997年度の「社会福祉ニュース」をお届けします。

この2・3年は国も立教大学も地殻変動に襲われましたが、教学の面では「全学統一カリキュラム」が発足しましたし、新座キャンパスに新しい学部(コミュニティ福祉学部と観光学部)を二つ開設するところまでこぎつけました。来春には希望に溢れた(新しい学部で勉強できるという意味で、又は立教の窓口が増えたので可能性が広がったという意味で)新入生の顔を見ることができるようでしょう。新座での新学部開設と連動してですが、本社会福祉研究所を池袋キャンパスに残して、引き続き大学・地域コミュニティにおける、社会福祉教育・実践・研究の拠点とすることを決定いたしました。今後共学際的で活力に溢れた活動を続けていくことを願っています。内外の御支援をよろしくお願い申し上げます。

1997年度の社会福祉研究所の活動

○公開講演会・社会福祉のフロンティア

- 第14回 「アダルトチルドレン
—私の物語を見つめ直す—」
1997年5月29日
於：立教大学7号館
講師 原宿カウンセリングセンター
所長 信田さよ子氏

- 第15回 「こころと病いと社会的援助」
1997年11月28日
於：立教大学7号館
講師 東洋大学教授 窪田 暁子氏

○家族援助技術セミナー

- 第6回 「サイコ・ドラマによる家族援助」
1997年6月14日
於：立教大学セントポールズ会館ほか
講師 山崎病院臨床心理士
北ノ丸クリニックカウンセラー
藤堂 宗継氏

○対人援助技術セミナー

- 第3回 「対人コミュニケーションスキル訓練」
1997年12月6日
講師 立教大学教授
本研究所所長 佐藤 悦子氏

○定例研究発表会

- 1997年4月19日
「高齢糖尿病患者のグループ心理療法の試み」
研究員：外川 春美
1997年7月19日
「社会福祉における情報化の意義と課題」
研究員：生田 正幸
1997年10月4日
「公的介護保険制度の導入と社会福祉」
所員：高橋 紘士
1998年1月10日
「『司法福祉』を問い直す」
所員：荒木 伸怡

慢性疾患を持つ高齢者の癒しの場に関わって

研究員 外川 春美

今年3月、2年7ヶ月間継続した、糖尿病という慢性疾患を持つ高齢者のグループ療法が終了した。筆者は、グループのリーダーとなる二人の心理士のうち、一人が転勤となったため、その後継者として関わることとなった。期間は、グループが開始されて一年後から、終了までの1年7ヶ月間、参加させていただいた。

このグループは、高齢者専門の総合病院に勤める心理士が、糖尿病の闘病生活において、治療過程がうまくいかない患者に心理的な援助をしていく中で、心理士自身が個別面接などに行き詰まりを感じ、その打開策として試みられた。当初は互いに未経験なため、文字通り試行錯誤を繰り返すすすめられた。しかし、自主的ではなく、主治医の紹介による参加のために、本人の動機付けが曖昧で、軌道にのるまでは多くの危機があったそうである。とうとう参加者が0人となったセッションに至り、リーダーがグループのあり方を再検討し、動機づけのはっきりした患者をもとめ参加者を募ったり、2、3セッションごとにリーダーがテーマを用意して、より話しやすくするようにしたところ、次第に参加者が増え、主要メンバーが自然淘汰され、グループの流れがスムーズに運ぶようになった。その結果、毎回の流れは、週に一回45分のセッションで、リーダーとなる二人の心理士が交代で司会と記録係、テーマの提供を担い、基本的にメンバー中心にテーマにそって、順番に話したいことを話すという形に定着した。司会者は、はじめとおわりの挨拶と、横道にそれたり発言者以外の方が話し出したりした場合の軌道修正、また必要に応じて知識や情報の伝達をおこなった。

筆者は、テーマもなく、また参加者が0人となった時期を経験しておらず、まさに苦勞せず動き出した船に乗せてもらった状態であったが、振り返ると、この「テーマ」があることでメンバーもリーダーも守られていたように感じている。

一度、メンバーの主体性の成長を期待して、テーマをなくし、なるべくメンバー自身にリーダーの役目を譲る方向をこころみたところ、それぞれの向かうところを見失ったような不安定な時期があった。互いの話し合いの後に、やはりテーマはリーダーが用意することに決まった。それは、グループが成長しても、高齢者という存在には、やはり保護が必要であるということだと思われた。メンバーの中にはメンバー同士の助け合いよりもリーダーに何かしてほしい、という気持ちが伝わってくる者もいた。その中で、話し出しのきっかけとしてはもちろん、なるべくメンバー主体で互いに気づき合う場であることを守りながら、こちらがグループにできることとしてテーマの提供は有意義であったのではないだろうか。

終了後、「同窓会」と称して3ヶ月に1度グループの集まりを行うことにした。3ヶ月という期間に大きな根拠はないが、血糖値の変化をみるためと、物理的に可能な時間とを考慮してこのペースで行っている。継続中よりも、この会のありがたさをメンバー共々感じている。それぞれにとって、グループの存在は、孤独感を和らげたり、安心感や自信を与えてくれる効果を持ち、互いにこの時間を大事にしていたのだと言う思いがはっきりした。最近のセッションでも直接的に「いいわね。ここでそういうお話が聞けて」という意見やまた、他者の話を参考に「さっそくやってみよう」と、同様の悩みを持つ者同士ならではの感想が多く聞かれていた。安定した雰囲気ばかりではなく、久々の再会のためか話題も多く、そのエネルギーは圧倒されるほどであり、次の会の約束をして部屋を後にすると、心地よい疲労感に気づかされるのである。

人はこうして癒されるんだなという思いができたのも、人の力、グループの力によるものと、今つくづく感じている。そして、共有させていただいた時間をありがたく感じている。

新所員紹介

自己紹介にかえて

菊野 一雄

佐藤悦子先生の御紹介により、今年度から所員に加えていただくことになりました。大学時代は「社会福祉」に近い領域に興味があり、卒業論文は当時(1960年代前半)大きな社会問題となっていた「最低賃金制」を取り上げました。古典学派からマルクスに至る「賃金論」を下敷きにして、原典に当たり乍ら仕上げた「労作」と自惚れていたのも束の間、教授から「君、精神物乞いって知っている？」と問われて立ち往生。「若気の至りで拾いすぎました」などと口答えるも、「拾い方だね、問題は」ととどめを刺され、ギャフンとなったことがなつかしく思い出されます。大学院に進んで、専門を「労務管理論」に絞ってからは、社会福祉の領域からやや離れた場を彷徨っていたように思います。

十数年前、身内に障害者を持つ身となった時、さまざまな悩みを抱きつつ、私なりに模索を繰り返しました。一時はどうしたらよいかと途方に暮れかか

った時期もあり、今もなお分からないことが沢山残っています。しかし、模索するなかで出会った水上勉の「あなたの所在はどこですか」という問いや、大江健三郎の「新しい人よ目覚めよ」という言葉に励まされ、あるいは今村仁司の『排除の構造』を読み解くなかから、「障害者雇用」の問題を究明して行こうと思いつき、今日に至っています。

今後は、機会論的アトミズムでもなく、かといって単純な近代超克主義でもない「方法」を求めて彷徨いつつ、福祉学と倫理学の峽の問題である「共生(ノーマリゼーション)の途」を模索して行きたいと思っています。

浅学非才な上、忙しさにかまけて研究の方は遅々としていますが、社会福祉研究所へ参加させていただくことを契機として、「障害者雇用」の問題究明に本腰を入れて行きたいと思っています。何卒よろしくお願い致します。

自己紹介にかえて

高橋 紘士

立教大学の社会福祉研究所については、以前から臨床系の福祉研究の拠点としての活動を承知していました。はからずもその伝統ある研究所の所員を拝命いたしましたこと、大変名誉に存じております。

来年開設されるコミュニティ福祉学部にも所属することになり、現在その準備のための仕事も担わせていただいておりますが、新学部も社会福祉研究所の活動を踏まえて構想されたと伺っております。その意味で新しいコミュニティ福祉学部と、社会福祉研究所の活動を有機的に連携させることも私の任務かと存じております。

また、立教大学からは福祉サービスの一線を担う数多くの人材を輩出してきています。これらの方々のお力添えなくしては今後のコミュニティ福祉学部の発展はあり得ないと考えておりますが、これらの方々との結節点の役割を社会福祉研究所が果たしていただけるのではないかと考えております。

微力ではありますが、立教大学全体での福祉研究

と広い意味での福祉教育の拠点としての社会福祉研究所の発展にいささかでもお役に立てればと存じております。

私自身はいわゆる社会福祉の政策計画系の領域で仕事をしてきました。近年は、地域福祉サービスの研究や福祉情報論そして成年後見制度、介護保険制度など高齢化社会への福祉システムの基盤整備に関わる政策研究をてがけてきておりますが、そのなかであらためて「社会福祉」とは何かということを自問自答しております。

近々社会福祉事業法の全面的な見直しを含む制度としての社会福祉の見直しが進む情勢ですが、ここでも、21世紀を控え、制度創設期である昭和20年代とはまったくことなる文脈であらためてこの問いに答えなければなりません。

社会福祉研究所での研究活動がこの答えを探る機会を与えてくれるであろうことを期待しております。

立教大学社会福祉ニュース 第19号 目次

- 「引き続き発信します」 1
- 1997年度の社会福祉研究所の活動..... 1
- 慢性疾患を持つ高齢者の癒しの場に関わって..... 2
- 新所員紹介..... 3
- 研究所スタッフ一覧..... 4

<研究所スタッフ一覧>

(1998年3月現在)

所 長	佐藤 悦子	立教大学社会学部教授	高橋 紘士	立教大学社会学部教授
副所長	木下 康仁	立教大学社会学部教授	高橋 良臣	登校拒否文化医学研究所代表
所 員	足立 叡	淑徳大学社会学部教授		
	安達 暎子	共栄学園短期大学社会福祉 学科専任講師	田中 一彦	淑徳大学社会学部教授
	荒木 伸怡	立教大学法学部教授	田宮 崇	長岡西病院院長
	岩佐 壽夫	家庭ケースワーク研究所長	西澤 稔	山口県立大学社会福祉学部 教授
	江口 篤寿	筑波大学名誉教授	長谷川 浩	東海大学健康科学部教授
	岡田玲一郎	社会医療研究所長	早坂泰次郎	日本IPR研究会代表, 立教大学名誉教授
	小川 憲治	長野大学産業社会学部教授	平木 典子	日本女子大学人間社会学部 教授
	小滝美智子	竹中工務店カウンセリング ルームカウンセラー	福山 清蔵	立教大学文学部教授
	梶原 達観	精神医学ソーシャルワーク 研究所長	柳澤 孝主	日本福祉教育専門学校専任 講師
	菊野 一雄	立教大学経済学部教授	山本 祐策	神戸国際大学経済学部教授
	坂口 順治	立教大学文学部教授	山本 恵一	東京国際大学人間社会学部 助教授
	櫻井 芳郎	淑徳短期大学社会福祉学科 教授		
	柴崎 正行	東京家政大学家政学部助教 授		
	庄司 洋子	立教大学社会学部教授		

研究員他 19名